自尊感情を育む乳児保育の実践

保田（やすだ）　維久子（いくこ）さん
（常磐会短期大学非常勤講師・元豊中市認定こども園 園長）

人権保育専門講座３では、保田維久子さんに「自尊感情を育む乳児保育の実践」と題してご講演をいただきました。講演では、自尊感情を育むための乳児保育の実践と人権保育の基本的な考え方についてお話しいただきました。

◇子どもの人権を守る

子どもは、「権利を行使する主体」です。しかし、発達的な特質から、自分で「自己の権利」を行使することは難しいため、権利を侵害する可能性のあるおとなに仲介をしてもらわなければなりません。したがって、おとなには、「子どもを尊敬の対象として、侵すことのできない権利の主体」として見ていくことが求められます。

保育のなかでは、「おとなの子ども観・教育観の問い直し」「乳幼児は弱い立場にあることを自覚すること・おとなのあり方の見直し」「人権の観点から乳幼児を取り巻くおとなや社会的な環境の問い直し」が大切にされなければならないと考えます。

◇乳幼児期の人権保育の基本的な考え方

- 乳幼児期の人権保育は、クラス集団づくりを日常的な遊びや生活のなかで行うことが基本。
- 担任には、様々な個性をもつ子どもが集まるクラスを、「集団として育てる」という観点が求められる。
- 集団に「人権力」を育てる。
  - ・周りのあらゆるヒトを尊敬する。
  - ・公平にみる力をつける。
  - ・偏見があれば「おかしい」と言う。

保育士が、子どもたちのモデルとなって人権保育を進めていく

【参加者のアンケートより】

- 保育士の言動の重要さを感じました。保育士の見方が、決めつけや偏見につながる可能性があると感じました。担任間、職員間で子どもの見方・とらえ方について話をしながら、様々な見方、視点で保育を進めていきたいです。
- 「保育士はモデル」というキーワードが刺さりました。子どもは、保育士の言動を見たり聞いたりしているので、子どもにとって、よいモデルになるように保育をしていきたいと思いました。
- 乳幼児期に丁寧な保育をすることが人権教育にもつながっていくのだと思いました。普段から言葉がけなどのかかわり方を工夫することで、子どもたちどうしや保育者とのやりとりも変化していくことを学ぶことができました。